

中国近世語学会研究集会 2006年12月17日

大東文化大学信濃町キャンパス

清末民初の中国語文法について

——『中国語歴史文法』に見られる「きわめて新しい」語彙・語法・表記について

大塚秀明（筑波大学）

1. はじめに 太田辰夫著『中国語歴史文法』の刊行から約半世紀

「大著『中国語歴史文法』（江南書院、1958年5月）が刊行されるに及び、これが人間業か、とまで恐れ入った記憶がある」

牛島徳次『中国語、その魅力と魔力』同学社、1996年

2. 提案 50年の研究を振り返り『歴史文法』のリニューアルを試みる。

(1) 会員の共同作業・報告を来年の大会に提案しては如何であろうか。

(2) 本稿は、「きわめて新しい」という項目の調査報告である。⇒資料 1

3. 先行研究（主として本発表に関係するもの）

(1) 著者(1916-99)自らの継続研究

『中国語歴代口語文』江南書院 1959年

『中国語史通考』白帝社 1988年

1974『儿女英雄伝』の言語 『日本中国学会』26集

1975『儿女英雄伝』の副詞 『神戸外大論叢』26-3

1970・72『小額』の語法と語彙 同 21-3・23-3

1973 社会小説『北京』の語法と語彙 同 24-3

『中国語文論集』汲古書院 1995年

1974『離婚』の語法と語彙 『神戸外大論叢』25-1

(2) 新資料報告・研究 ⇒資料 2

『小額』（1908）波多野太郎 1968 太田辰夫 1969

『燕京婦語』（1906）鱒澤彰夫 1991 江藍生 1994

『埋香記』（1914）落合守和 2006

4. 調査結果と今後の展望

(1) 「きわめて新しい」文法項目の時期区分

19世紀60年代 (5) 關於 (16) 差点兒

清末20世紀 (1) [他+心] (2) 好些個 (4) 上 (6) 跟 (7) 稍微 (8) 也許 (11) ~的

民国初頭1910年代 (5) 對於

1920年代 (3) 越来越 (9) 甬 (10) 那麼 (13) 哪 (14) 仨 (15) 簡直

1930年代 (12) 不然的話

1940年代 (17) 嘛

(2) これから ①「補修」⇒資料 3

②「項目追加」“為了”“按照”

5. 注記

(1) [他+心] 『漢語大詞典』は『龍鬚溝』(1950)の例を挙げる。

①太田辰夫 1970・72 『小額』(1908)「三人称尊称は、字としては“他”を用いるが、かならず(音貪)と注音があり、普通の“他”と区別している」*ことばとしては存在

②江藍生 1994 『燕京婦語』(1906)「最も早く[他+心]で単数第三人称尊称を示した資料である。……『国音常用字表』(1930)が初めて収録した」*手書き資料と辞書項目

③『埋香記』(1914) 1箇所の使用が見られる。*活字では早い資料のひとつ。

④本発表 『標準語大辞典』(1935)に収録。

(2)好些個 『漢語大詞典』が挙げる例には作品名がない。

太田辰夫・竹内誠 1992 『小額』(1908) 索引には9例が挙げられている。

(3)越来越 『漢語大詞典』には項目がない。

①太田辰夫 1974 『離婚』(1933)「漸層表現に“越来越…”を用いる。これは極めて新しいらしく、『小額』や『社会小説北京』にも用例がない」*用例報告

②本発表 『老張的哲学』(1926)にあった。他預料那里是越来越人少的 (25)

(4)上 『漢語大詞典』は⑩去、到として『顔氏家訓』『西遊記』『女店員』の例を挙げる。

①太田辰夫 1974 『儿女英雄伝』40回に例を挙げるも、後人の加筆を指摘する。

②太田辰夫・竹内誠 1992 『小額』(1908) 索引には7例が挙げられている。

(5)对・対於・關於 『漢語大詞典』は“对”には『探索集』(1981)、“対於”には『庶民的勝利』(1918)、“關於”には明・宋濂と宋・司馬光の作品を挙げる。

尾崎實 1989 “關於”と“対於”について(その一) 『中国文学会紀要』第10号

“關於” 1863年7月締結の清国とデンマーク国間の天津条約第26条

“対於” 1911年英国と締結した外交文書 『中外旧約章彙編』の利用

(6)跟 『漢語大詞典』は『老残遊記』(1903)、『李家莊的變遷』(1946)の例を挙げる。

太田辰夫 1973 『北京』(1924) “跟”は清末に至って介詞および連詞となった。その用例は『老残遊記』(1903?)、『清国風俗会話篇』(1906)、『小額』(1908)などに見える

(7)稍微 『漢語大詞典』は『乱弾』(1938)の例を挙げる。

①陳群『近代漢語程度副詞研究』巴蜀書社、2006に『官場現形記』(1903)、『老残遊記』(1903?)の例を挙げる。『儿女英雄伝』から1例(13回)を挙げるも光盤検索のためか、誤り。

原文には“少微”とある。

②本発表 『標準語大辞典』(1935)に収録。

(8)也許 『漢語大詞典』は『孽海花』(1905)の例を挙げる。

①太田辰夫 1974 『儿女英雄伝』40回に例を挙げるも、後人の加筆を指摘する。

②本発表 『二十年目睹之怪現狀』(1903)にあった。這幾首詩也許是在那上頭(25)

(9)甬 『漢語大詞典』は『楊鞭集』(1926)の例を挙げる。

本発表 “甬”は『漢語大字典』に『龍龕手鑑』の例を挙げるが、現代語の否定副詞ではない。『新字典』の卷末新字拾遺にも収められているが「与罷音義並同。江南俗字」とあり、やはり現代語の否定副詞ではない。「冷門漢字」の利用。『標準語大辞典』(1935)に収録。

(10)那麼 『漢語大詞典』は『林家舖子』(1932)の例を挙げる。“要是”に呼応する。

本発表 「それでは」の意の用例として『愛的教育』(1926)にあった。“那麼、再会了!”

(11)～的 (=到、在) 坐的這兒(ここにこしかける) 跑的那兒(向うへ走っていく)

太田辰夫・竹内誠 1992 『小額』(1908)索引には11例が挙げられている。

(12)不然的話 『漢語大詞典』には項目がない。

本発表 『子夜』(1933)にあった。不然的話、你做手脚的時候還是避過她眼睛妥当些(8)

(13)哪 『漢語大詞典』は『香稻米』(1931)の例を挙げる。

本発表 趙元任が1924年“那”底分化底我見を『国語月刊』2・2に発表し、支持を得る。従来は“哪吒”に用いられていた。「冷門漢字」の利用。『標準語大辞典』(1935)に収録。

(14)仨 『漢語大詞典』は『播火記』(1963)の例を挙げる。

①太田辰夫 1958 『儿女英雄伝』を例に“撒官板兒”の“撒”がsaであることを述べる。

②———・竹内誠 1992 『小額』(1908)你我他三(薩平声)的 22頁12行“三”sā、今“仨”と書く*ことばとしては存在

③本発表 趙元任が1927年「倆、仨、四呃、八阿」を『東方雜誌』24・12に発表し、支持を得る。従来は“倆”から類推で新たに作られた。『標準語大辞典』(1935)には未収、『国語辞典』に収録。

(15)簡直 『漢語大詞典』は『野草』(1927)の例を挙げる。

①太田辰夫 1975 『儿女英雄伝』「現代語では、「まるで」「まったく」の意……『品花宝鑑』の例ではすでにこの傾向を見せているが、『儿女英雄伝』の用例は、原義にとどまっている*『品花宝鑑』(1849)に現代語用法の萌芽、“的”が備わる。

②本発表 『標準語大辞典』(1935)に収録。

(16) 差点児 『漢語大詞典』は『脊背与奶子』(1932)の例を挙げる。

太田辰夫 1975 『儿女英雄伝』「古くは“差些児”といった。本書には見えない。……

差点児没要了我的命(語言自邇集、談論篇 18) * 『語言自邇集』(1867)の用例報告。

(17) 嘛 『漢語大詞典』は『淘金記』(1943)の例を挙げる。

本発表 原刊本の用字法は未確認。辞書への記述は『新華字典』では 1962 年修訂重排印本から。それ以前の各版(53 年・54 年・57 年・59 年)には“嘛”は“喇嘛”として用いられていた。「冷門漢字」の利用。『標準語大辞典』(1935)に収録。

この時期の規範化を反映するものに、文字改革出版社『漢語拼音詞匯(初稿)』1958 年とその増訂稿 1963 年、また光生館『現代中日辞典』1961 年とその増訂版 1965 年を比べると、増訂稿と増訂版に軽声の“嘛”が加わっている。

とは言え、1958 年発行の『歴史文法』にすでに“嘛”が言及されていることは注目すべきである。

解体論への言及を忘れた。

琉球官話は資料としては頼りにならない。

外国語との接触と国語政策に注目せよ。

追記 _____

発表を終えて

大塚秀明

発表では、さまざまなご質問・ご意見をいただき、ありがとうございます。

特に「冷門漢字」の利用について、佐藤会長より、(9)甬にせよ、(13)哪にせよ、(17)嘛にせよ、こうした文字を使い始めた人は昔、この字が韻書に収録されていたことは意識になかったのではないかとのご指摘をいただいた。発表では「冷門漢字」の利用としたが、「利用」の文字は削除したい。また(3)越来越は、落合守和氏が日本中国学会全国大会で『正宗愛国報』(1908)にその使用例があることを発表されていたこと、(10)那麼は『醒世因縁伝』に用例が見えること、(11)~的(=到、在)は現代語とのつながりに多少不詳なところがあるが朝鮮資料に用例が見られることなどが、発表時にお教えいただき、発表後に気づいた事項である。

2007 年 2 月 7 日追記

資料 1 『中国語歴史文法』に見られる「きわめて新しい」12項目+準ずるもの5項目

- (1) 現代語の“ ”はきわめて新しく、尊称の“您”の類推によって民国以後に用いられるようになったものらしく、あまり普及していない。(12・2・4 尊称 108 頁)
- (2) “好些”はまた“個”をつけて“好些個”として用いる。きわめて新しいらしく清以前の用例を検出していない。(13・2・2 数詞・助数詞を用いるもの 143 頁)
- (3) 現代語ではしばしば、“越来越好”(いよいよよくなってきた)のごとく用いる。……その生産はきわめて新しいらしい。(15・14・2 比例的な漸層 180 頁)
- (4) “上”が介詞として用いられるようになったのはきわめて新しいことのように、(17・3 方向 253 頁)
- (5) “对”“對於”“關於”が関連するものを示す用法はきわめて新しいらしく、清代までの用例を検出しない。(17・4 関連 254 頁)
- (6) “跟” 動詞としては或者の後につづくこと。これが介詞化したものも、やはりつき従う意を失っていない。……これが共同の介詞または連詞として用いられた例はきわめて新しいようである。(17・15 共同 266 頁)
- (7) “稍微”ができたのはきわめて新しいことらしい。(18・2・2 弱度をあらわすもの 272 頁) 稍為輕便值錢一点的首飾就掖在腰裏去了(老殘遊記4)
- (8) “也許”ともいうが、この語はきわめて新しいらしい。(18・5・9 推測 297 頁)
- (9) “甬” “不用”の合音できわめて新しい。(18・6・2 現代語の否定副詞 303 頁)
- (10) “那麼”を連詞として用いることはきわめて新しいらしく、清代では多く“那麼着”または“這麼着”といった。(19・1・4 承接 323 頁)
- (11) “的”(f) 動詞のすぐあとにつき、動作のおこなわれる場所や到達点をあらわす。…この用法はきわめて新しいようで、文献にはあまり見えない。(20・1・3 接続 357 頁)
- (12) “不然的話”(もしそうでなければ)……おそらく、きわめて新しいのではないかとおもう。(20・1・4 仮定 358 頁)
- (13) 疑問(選択)の“哪”はがんらい“那”とかかれ“哪”を用いるようになったのはごく最近のことである。(12・3・3 疑問 125 頁)
- (14) 儿女英雄伝になると“俩”はしばしばみえるが“仨”のほうは稀である。“仨”という文字はごく新しく作られたらしい。(13・1・4 “俩・仨” 138 頁)
- (15) 簡直 この語は比較的新しいようで、儿女英雄伝には“剪直的”につくり、必らず“的”をとる。(18・5・4 決定 290 頁)
- (16) 現在では“差点兒”というが、この語はたいへん新しいようである。(18・5・8 僅差 296 頁)
- (17) “麼”はまた不平不満をあらわすことがある。……最近ではこのばあい“嘛”を用い、疑問の“嗎”と書きわけることが多い。(20・2・1 甲類 362 頁)

資料 2 新資料研究史

☆『小額』(1908)研究史

波多野太郎 1968 評論晚清短編社会小説「小額」——中国小説戯曲史研究——

『日本中国学会報』第 19 集

——1968.12 景印短編小説小額 付評論短編社会小説「小額」——中国小説史研究——

『横浜市立大学紀要』A-44 No.186

太田辰夫 1969 社会小説小額 語釈及索引 (北方語研究叢刊第 1 種) 私家本

—— 1970・72 『小額』の語法と語彙 神戸外大論叢 21-3・23-3

——・竹内誠 1992 『小額社会小説』汲古書院

☆『燕京婦語』(1906)研究史

鱒澤彰夫 1991 『中国文学研究』17 期

—— 1992 『燕京婦語』好文出版

江藍生 1994 『燕京婦語』所反映的清末北京語特色 『語文研究』4 期

『近代漢語探源』商務印書館 2000 年所収

☆『埋香記』(1914)研究史

落合守和 2006 『社会小説埋香記』の言語について

『日本中国語学会第 56 回全国大会予稿集』

資料 3

『中国語歴史文法』“或者…或者…”(19.1.3 選択 321 頁)

“或者”をくりかえし用いる例は未検出。

向憲編著『簡明漢語史』には、初刻拍案驚奇・20、西遊記・49 の用例が挙げられている。

441 頁 (高等教育出版社 1993 年)